

「生命の教育」創始者 谷口雅春先生 今月の言葉

# 子供が神秘として感じる心を大切にしよう

## 一層大いなる生命に目覚めさせる

或る児童教育の本で、小学生に授業をはじめの前にあ  
たつて五分間ほど目をとじしめ、静坐せしめたところが、  
その教室全体の児童の成績が見ちがえるほどに善くなつ  
たということを読んだことがある。これは実にさもある  
べきことだ。児童が八、九歳にも達したならば、毎日数  
分間ずつ静坐せしめて自分の生命力を自由に一カ所に集  
める練習を積ませることが必要である。この練習には父  
母と共に毎朝神仏に礼拝せしめる習慣をつけるが一等好

いのである。その家の宗教が神道で、神の宮の前で礼拝  
する習慣ならば、その神の宮に精神を集めさせ、その家  
の宗教が仏教で仏壇の前で礼拝する家ならば、仏壇の中の  
仏像に精神をあつめさせ、その家がキリスト教で神棚や仏  
壇なしにお祈りをする習慣のある家ならば、掌を合わし  
てその手のひらに精神をあつめさせて礼拝するのである。  
このことは子供に、いはを教えると同じように、否、  
それよりも尚必要な事である。それによって子供は一層  
大いなる生命——吾らの生命の親様——の聖旨にしたごと  
うて生きようという最初の敬虔な傾向をやしなうことに  
なるのである。

（新編『生命の實相』第22巻92～94頁）

## 生命の不思議さにビツクリする心

少年よ、少女よ、あらゆる事象にビツクリせよ。ビツクリせよといっても、こわがれというのではない。その事象の奥にある「生命」の不思議に驚異するのだ。林檎が落ちても、その落ちる力の不思議さにビツクリせよ。鉄瓶の蓋が持ち上がるならば、それを持ち上げる湯気の力にビツクリせよ。美しく咲いた花を見るときには、その咲く花の力の不思議さにビツクリせよ。また自分自身の生きている力にビツクリせよ。

少年よ、少女よ、青年よ、否、壮者も、老者も、「あなたが生きているのは心臓が動いているからです。心臓がとまれば死にます」などという医学の教でこの不可思議な生命を当り前の現象だとは思わない。医学には心臓が動く事は判つていても心臓が何故動くかは判らないのだ。生命がどこから来るかは判らないのだ。まだまだ当り前だというには早いのだ。好い加減なところでビツク

リすることを止めるな。

林檎が落ちたのを見て、その不思議さに驚異したニュートンや、湯気が鉄瓶の蓋をうごかす力に驚異したジェームズ・ワットは、科学界の大天才となったのである。生老病死の四苦を見てビツクリした釈迦は一大宗教的天才となったのである。自分に肉親の父親がないことを知ってビツクリしたイエスは、天に父を発見してこれも宗教的天才となったのである。自然や人間の美を見てビツクリした多くの人々は、ラファエルとなり、ミケランジェロとなり、ミレーとなり、ロダンとなり、シエイクスピアとなった。実際、天才とはいつまでも少年少女時代の「ビツクリする心」を成長後も有ち続けている人のことである。

(新編『生命の真相』第22巻116～118)

神秘を「当り前」と押し消してはいけない

諸君は、子供が「何故空にお星様があるの、お星様は何故落ちないの、お星様は何故光っているの……」などとい

うほとんど無限に尽きない質問を矢つぎ早やに浴びせかけ

られて弱らされたことはないであろうか。「もうこの子の

うるさいのには閉口する」と小言をいったことはないで

あろうか。「お星様が光っているのは当り前じゃないか。

花が咲くのは当り前じゃないか」などとあらゆる神祕を

「当り前」という説明に押しつけて、子供の「ビックリ

する心」を押し消してしまったことはないであろうか。

そういう時にはこういって答えよ——「それは実に貴

い不思議なことだ。眼に見えない不思議な神様の息がか

かるとお星様は光るのだ。眼に見えないところにも神様

はいなさるのだ。お星様が落ちないのもその神様のお力

だ。花が咲くのもその神様のお力だ。神様のお力をお迎

えするようにこうして水をかけ土を耕して人間が待つて

いるのだ」と。

かくの如くいつて子供の「神祕がる心」を生かせ。そ

れを押し消すな。「神祕がる心」こそインスピレーショ

ンの源泉である。直覚は神祕にあこがれる心へのみ、

照射して来る神祕界からの光であるのだ。

(新編『生命の真相』第22巻118～119)

神祕を感じる心から子供の天才が発揮される

神祕なことを神祕として教えよ。深く考えれば実に神

秘であるところの現象を、当り前の茶飯事だとして、見

のがしてしまふような習慣をつけてはならぬ。人間を心

臓というモーターで動く機械だと教えてはならぬ。草木

を唯の毛細管現象で生長する機械だと教えてはならぬ。

神仏を偶像であると教えてはならぬ。あらゆる物にやど

る生命の神祕を教えよ。神祕に驚異し、生命を崇敬し、

その生命の神祕に一步でも近づくことを名誉と思ひ、生

命を合掌礼拝するように子供を教えよ。

嗚呼！ 生命の神祕を驚異し尊ぶ心——隣人愛も、生

物愛護も、敬虔なる宗教心も、画期的な科学的発明も、

偉大なる哲学も、妙なる芸術も、それから実業界の素晴

しき成功さえも、皆この生命の神祕を礼拝する心によつ

て得られるのだ。

(新編『生命の真相』第22巻121～122頁)